



TITLE:

大阪膀胱腫瘍研究会報告(1) 大阪府下における膀胱腫瘍患者の疫学的調査

AUTHOR(S):

大阪膀胱腫瘍研究会

CITATION:

大阪膀胱腫瘍研究会. 大阪膀胱腫瘍研究会報告(1) 大阪府下における膀胱腫瘍患者の疫学的調査. 泌尿器科紀要 1977, 23(5): 445-450

ISSUE DATE:

1977-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122107>

RIGHT:

大阪膀胱腫瘍研究会報告(I)

大阪府下における膀胱腫瘍患者の疫学的調査

大阪膀胱腫瘍研究会*

REPORT OF THE BLADDER TUMOR
STUDY GROUP IN OSAKA (I)REGIONAL DISTRIBUTION OF PATIENTS WITH
BLADDER TUMOR IN OSAKA PREFECTURE

Bladder Tumor Study Group in Osaka

This is a statistical study of age and sex, chief complaints and regional distribution of 850 patients with bladder tumors who consulted the urological clinics belonging to the Bladder Tumor Study Group in Osaka during the one and a half years from January 1, 1975 to June 30, 1976.

1. Age: The greatest number of patients is found in the age group 60-69 years old, followed by those 70-79 years old and then those 50-59 years old. The ratio of patients to the general population of Osaka Prefecture under 39 years of age is 0.69 per 100,000. The ratio increases with age rapidly and at least one out of every 1,000 persons has a bladder tumor among those over 70 years of age.

Sex: The ratio of male to female patients is 3.3 to 1.0.

2. Chief complaints: The most common complaint is macroscopic hematuria (76%), followed by pollakisuria (12%), pain on urination (10%), and no symptoms (2%).

3. Regional distribution: 714 patients of the 850 (84%) are from Osaka Prefecture, and 73 from Hyogo Pref. (8.6%). The remaining 7.4% are from several other prefectures. 326 patients of the 714 (45.7%) from Osaka Pref. are residents of Osaka City. Per 100,000 of the population of Osaka Pref. 8.6 people have bladder tumors, and per 100,000 of the residents of Osaka City the number increases to 11.7. Therefore, the frequency of patients with bladder tumors in Osaka City is considerably higher than in Osaka Pref..

内 容

緒 言

I. 年齢および性別

* 本研究会の世話人は栗田 孝, 新谷 浩, 園田孝夫, 前川正信, 宮崎 重であり, 事務所は大阪医科大学泌尿器科内にある。

本研究会参加施設:

大阪医科大学, 大阪市立大学, 大阪警察病院, 大阪大学, 大阪赤十字病院, 大阪府立成人病センター, 大阪府立病院, 大阪労災病院, 関西医科大学, 関西労災病院, 北野病院, 近畿大学, 県立西宮病院, 国立大阪南病院, 済生会吹田病院, 済生会中津病院, 市立堺病院, 住友病院, 東大阪市立中央病院, 松下病院
(アイウエオ順)

A. 年齢分布

B. 性別

II. 主訴

III. 大阪府下およびその周辺における膀胱腫瘍患者の地域別分布

結 語

緒 言

大阪膀胱腫瘍研究会は1975年1月大阪府下における5つの大学医学部および医科大学を含む, Table 1に示すごときおもな総合病院の泌尿器科20施設の参加のもとに発足した。本研究会の目的は大阪府下における膀胱腫瘍患者の実態把握とその治療成績の向上に寄

Table 1.

大阪膀胱腫瘍研究会
第3回集計報告 1975.1.1 ~ 1976.6.30
参加施設

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
1	大阪医科大学	大阪医科大学	大阪医科大学
2		大阪市立大学	大阪市立大学
3	大阪警察病院	大阪警察病院	大阪警察病院
4	大阪大学	大阪大学	大阪大学
5	大阪日赤病院	大阪日赤病院	大阪日赤病院
6			大阪府立成人病センター
7			大阪府立病院
8	大阪労災病院	大阪労災病院	大阪労災病院
9	関西医科大学	関西医科大学	関西医科大学
10	関西労災病院※		関西労西病院※
11	北野病院	北野病院	北野病院
12		近畿大学	近畿大学
13		県立西宮病院※	
14			国立大阪南病院
15		済生会吹田病院	済生会吹田病院
16	済生会中津病院	済生会中津病院	済生会中津病院
17		市立堺病院	市立堺病院
18	住友病院		
19	東大阪市立中央病院	東大阪市立中央病院	
20	松下病院		
	12 施設	14 施設	16 施設
	20 施設		

(※兵庫県)

与することである。

本報告は1975年1月1日から1976年6月30日までの1年6ヵ月間に上記の諸施設を訪れた850人の膀胱腫瘍患者について、性別および年齢、主訴、地域別分布をしらべたものである。

統計の集計は6ヵ月ごとにおこなった。すなわち、第1回集計は1975年1月から6月まで、第2回は同年7月から12月まで、第3回は1976年1月から6月までであり、集計に参加した施設は第1回が12施設、第2回が14施設、第3回が16施設で延20施設となっている。また、患者数は第1回が318人、第2回が288人、第3回が244人で総数850人である。

I. 年齢および性別

A. 年齢分布

膀胱腫瘍患者を39歳以下、40歳代、50歳代、60歳代、70歳代および80歳以上に分け、不明の9人を除く841人について年齢分布をみたのが Table 2 であり、60歳代が最も多く、次いで70歳代、50歳代の順となっている。しかしこれを1975年10月1日現在の大阪府人口

の年齢構成に対する患者比率としてみると Table 3 のごとく、70歳代が人口10万人について105.1人と最も多く、次いで80歳以上の93.9人、60歳代の59人となっていて、以下年齢が若くなるほど少なくなり、39

Table 2. 年齢および性別

年齢	性	男	女	計
0 ~ 39		33	4	37
40 ~ 49		65	19	84
50 ~ 59		112	28	140
60 ~ 69		217	64	280
70 ~ 79		179	68	247
80 ~		42	10	52
不 明		7	2	9
第1回集計		258	60	318
第2回集計		209	79	288
第3回集計		188	56	244
計		655	195	850

Table 3. 年齢別頻度 (人口10万につき)

年齢	患者数/人口※	頻度
0~39	37/5,776,420	0.64 人
40~49	84/1,090,005	7.7 人
50~59	140/642,863	21.8 人
60~69	280/474,392	59.0 人
70~79	247/235,103	105.1 人
80~	52/55,394	93.9 人

※ 大阪府人口 (昭和50年10月1日)

8,278,925人=8,274,177人+4,748人
(年齢不詳)

Table 4. 主 訴

血 尿	674例	76%
頻 尿	110例	12%
排尿痛	82例	10%
無症状	21例	2%
計	887例	100%

歳以下では人口10万人につき0.64人となっている。
Fig. 1 は男性, 女性それぞれについて, 性別により患者の年齢分布に差があるか否かをみたものであるが, 両者の間に有意の差異は認められない。

B. 性別

膀胱腫瘍患者の性別をみると Table 2 のごとく, 男女比は第1回集計では男性が78.9%, 第2回集計では72.6%, 第3回集計では77%となっていて, 毎回ほぼ同じ値となっている。したがって総計850人についてみると, 男性は655人, 77%を占めており, 男女比は3.3:1である。

II. 主 訴

Table 4 は患者の主訴についてしらべたものである。肉眼的血尿を主訴とするものが最も多くて76%, すなわち膀胱腫瘍患者4人のうち3人までが血尿を訴えて病院を訪れていることがわかる。次いで頻尿, 排尿痛がそれぞれ12%, 10%となっているが, 全く無症状のものが2%存在する。なお, この表の数字の合計が887となっているのは, 2つ以上の主訴を有したものがあったためである。

III. 大阪府下およびその周辺における膀胱腫瘍患者の地域別分布

Fig. 2 は1975年1月から1976年6月までの1年6

ヵ月間に Table 1 に示した20施設を訪れた850人の患者の地域別分布を示したものである。当然のことながら大阪府下の患者が最も多くて714人と全体の84%を占め, 次いで兵庫県が73人, 8.6%で, これらの両府県で全体の85%となっている。また, 近畿地区以外からの患者は18人, 2.1%であった。

次に, 大阪府下の膀胱腫瘍患者714人の地域別分布を示したのが Fig. 3 である。これを1975年10月1日現在の大阪府の人口8,278,925人で割ると0.0000862となり, 人口10万人について8.6人の膀胱腫瘍患者が前記の諸施設を訪れたことになる。このうち大阪市内の患者は326人で45.7%と全体の半数近くを占めており, これを大阪市の人口2,778,975人で割ると人口10万人について11.7人となり, 大阪市内のほうが大阪府全体よりも多くなっている。Fig. 4 は人口10万あたりの患者数を地域(市, 郡)別に示したものであり富田林市の14人が最高で, 次いで大阪市の12人, 守口市および門真市のそれぞれ11人が多く, 府下の周辺では少ないという傾向がみられる。

Fig. 5 は大阪市内の患者326人についての各区分別の患者数を示したもので, これを人口10万あたりの患者数で示したのが Fig. 6 である。最高は東成区の23人, 次いで東住吉区, 阿倍野区の20人, 生野区の19人, 浪速区および北区の18人などが多い地区で, 住之江区の4人, 西淀川区の3人などが少ない地区となっている。

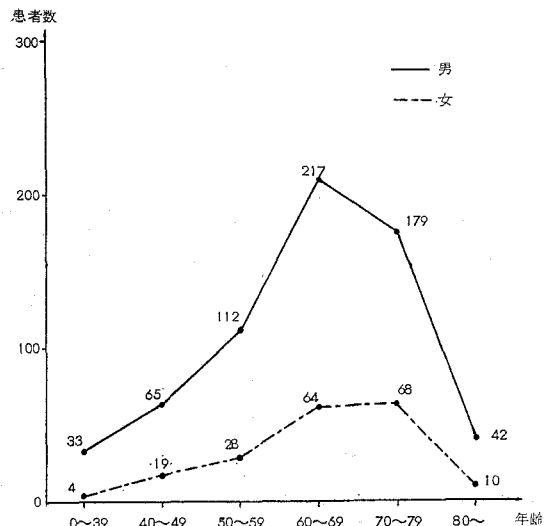


Fig. 1. 性別による年齢分布

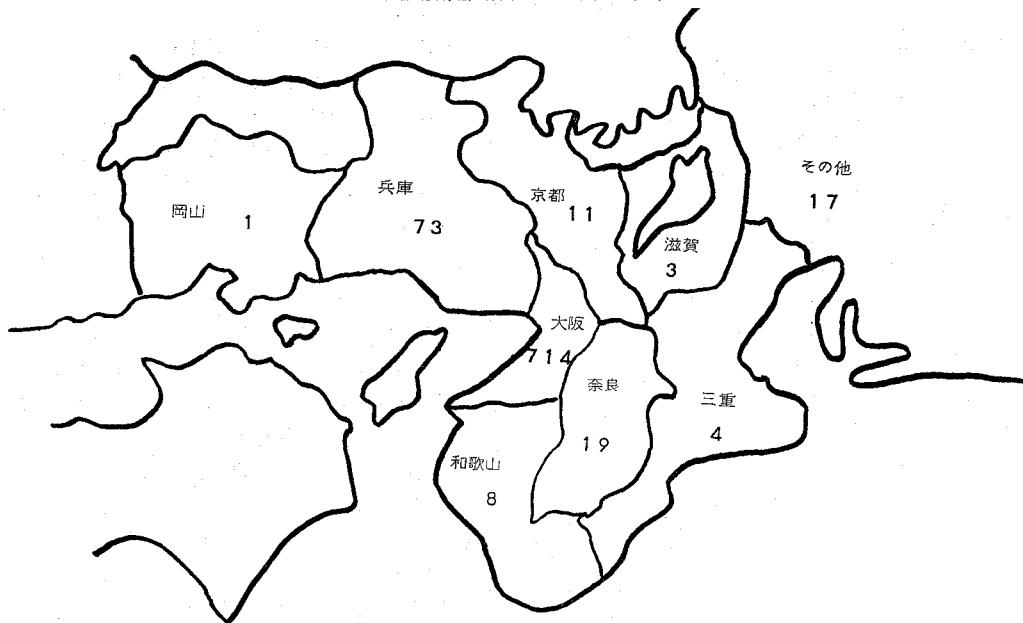


Fig. 2. 本研究参加施設を訪れた大阪府およびその周辺における膀胱腫瘍患者の地域別分布 (総数 850人)

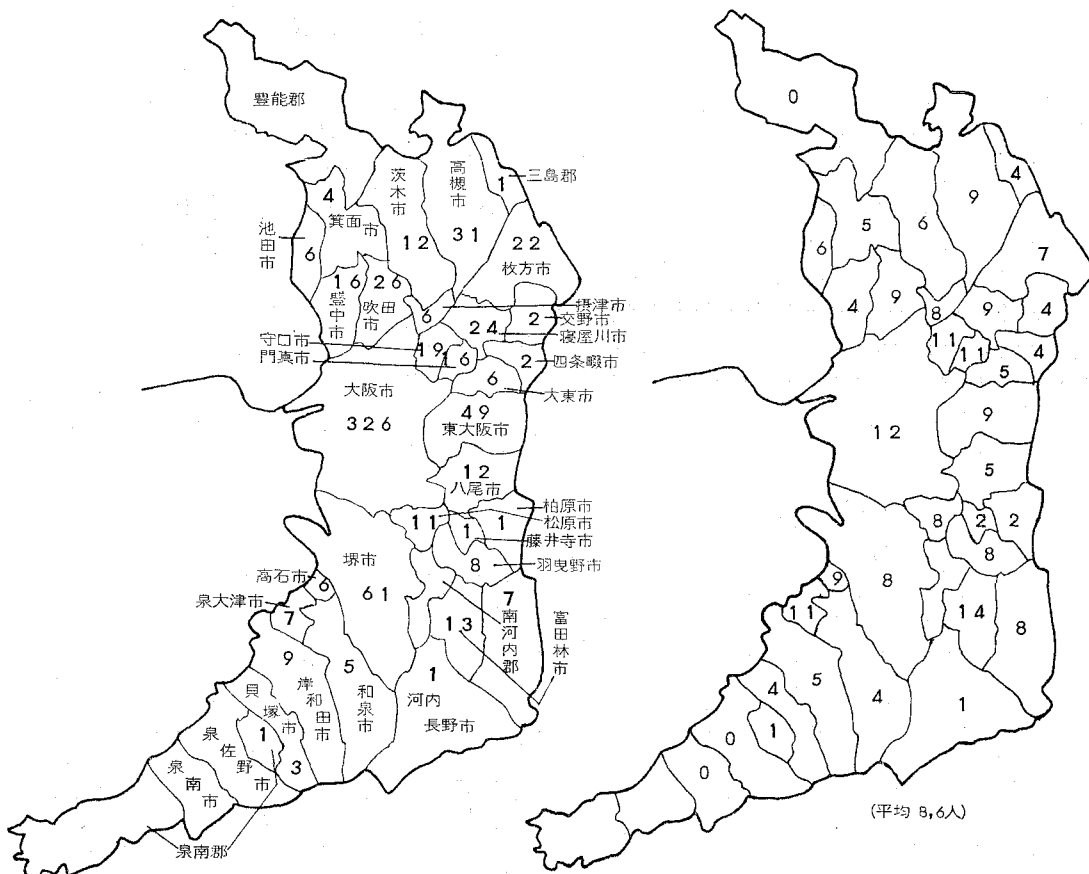


Fig. 3. 大阪府下における膀胱腫瘍患者 714人の地域別分布

Fig. 4. 大阪府下における膀胱腫瘍患者の人口10万あたりの患者数 (1976.6.30現在)



Fig. 5. 大阪市内における膀胱腫瘍患者 326人の地域別分布

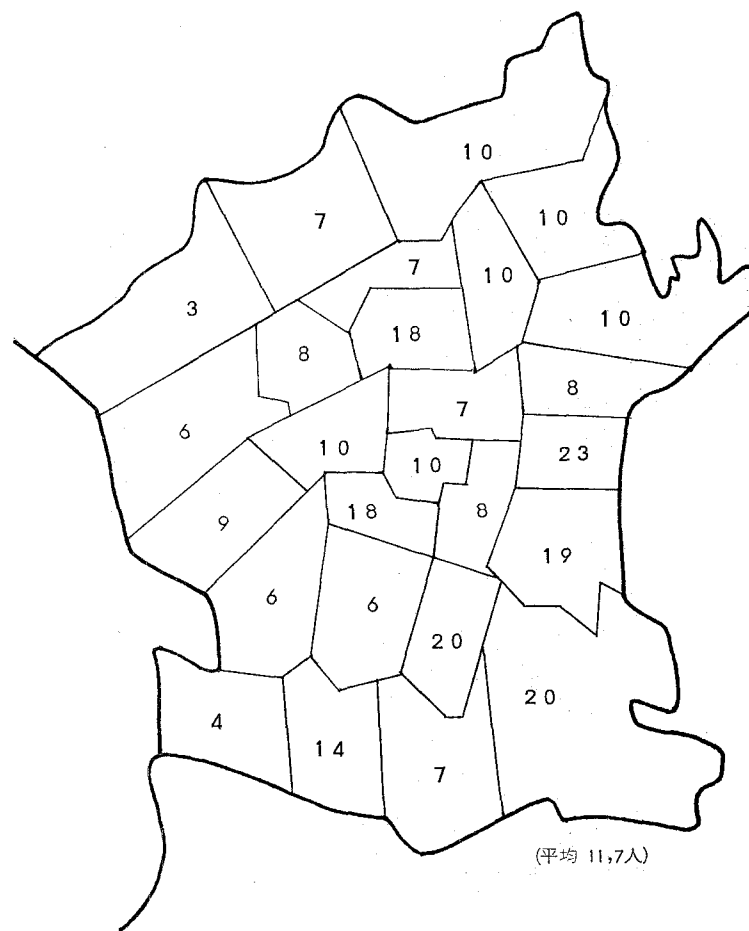


Fig. 6. 大阪市内における膀胱腫瘍患者の人口10万あたりの患者数 (1976.6.30現在)

結 語

1975年1月1日から1976年6月30日までの1年6カ月間に、本研究会に参加している大阪府下のおもな総合病院の泌尿器科20施設を訪れた850人の膀胱腫瘍患者について、性別および年齢、主訴、地域別分布をしらべた結果は次のごとくであった。

1) 年齢分布は患者の実数では60歳代が最も多く、次いで70歳代、50歳代の順であったが、大阪府人口の年齢構成に対する患者比率をみると人口10万人につき39歳以下では0.64人であるが、年齢の増加に伴って急激に増加し、70歳以上では約1000人に1人の割となっている。また、性別では男性のほうが女性よりも多く、その比は3.3:1であった。

2) 主訴では肉眼的血尿が最も多く全体の76%を占め、次いで頻尿が12%、排尿痛が10%であり、全く無症状のものが2%であった。

3) 地域別分布では850人中714人、84%が大阪府下の患者であり、次いで兵庫県の8.6%であった。また、大阪府下の714人中326人、45.7%が大阪市内の患者であった。これを人口10万あたりの患者数になおしてみると、大阪府全体では8.6人、大阪市では11.7人となり、大阪市内のほうが大阪府全体の平均よりも多くなっている。

終りに、本研究会を支援していただいた日本新薬株式会社に謝意を表します。

本論文訂正

Table 1. 第3回の欄、関西労西病院を関西労災病院に訂正